

法政大学学術機関リポジトリ
HOSEI UNIVERSITY REPOSITORY

法政大学ラグビー部の歩み

著者	武村 秀夫
出版者	法政大学体育・スポーツ研究センター
雑誌名	法政大学体育・スポーツ研究センター紀要
巻	30
ページ	35-40
発行年	2012-03-31
URL	http://hdl.handle.net/10114/7002

法政大学ラグビー部の歩み

The History of Hosei University Rugbyfootballclub

武 村 秀 夫 (法政大学)
Hideo Takemura

はじめに

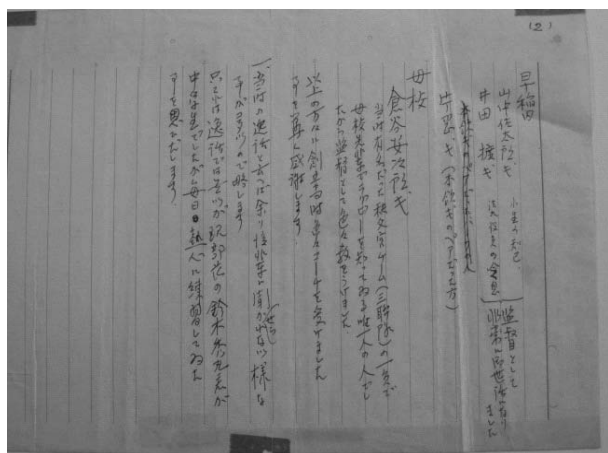
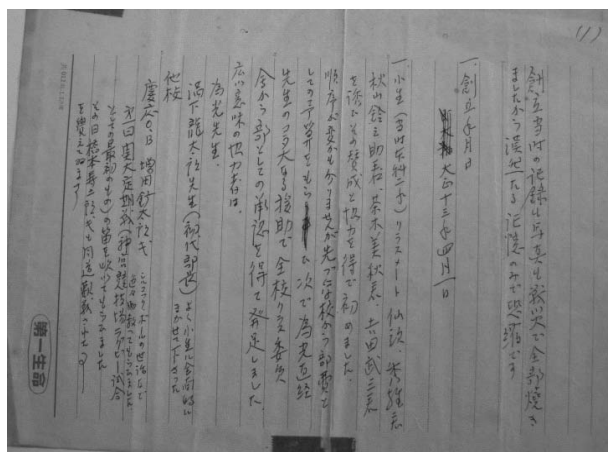
5月中旬、我がラグビー部が夏合宿地菅平の常宿として長年お世話になっている旅荘「山喜荘」専務より「今年法政は菅平合宿をして80年になりますので、記念試合をして下さい」との電話があった。法大ラグビー部はあと3年で創部90年を迎える。筆者自身も法大ラグビー部と出会い、菅平に足を運ぶ様になり50年を超えた。山喜荘専務の電話を契機に筆者の記憶と、先輩の残された「法大ラグビー部60年史」を参考に、ラグビー部の歴史と菅平との繋がりを、簡単ではあるが紹介させていただく。詳細な試合結果等については省かせていただき、創部から今日までの歩みを思い出しながら記させて頂く。後にしばしば登場する鈴木秀丸元部長、監督は筆者の実父であり、昭和5年(1930)日本代表が初結成され、カナダ遠征メンバーに法大初の日本代表選手として選ばれている。

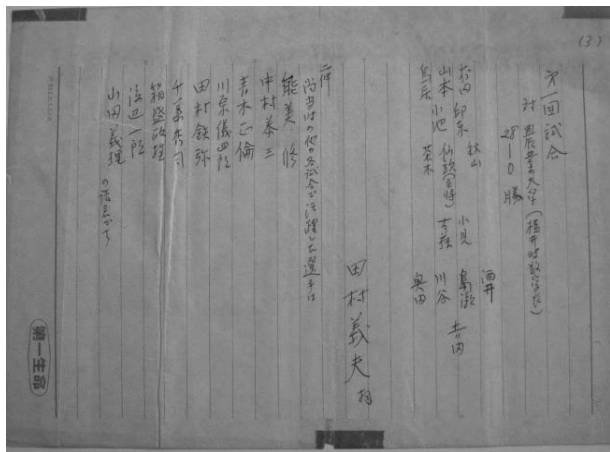
創部期

法政ラグビー部は、大正13年、卒業生倉谷安二郎(大正11年卒)を初代監督とし、仙頭秀雄：田村義男：秋山鈴之助：吉田武三：茶木美秋：小池寅雄を中心に創部された。最初は学友会に承認されずにいたが、部員たちの努力により、間もなく大学に承認された。この事を吉田武三は次のように記している「我々の同級生が野球部をはじめその他各部の委員をしていたので満場一致で(学友会に)認められた」この事により大学から部費として300円ほどの支給を受け、ここに法政大学ラグビー部が正式に誕生したのである。

田村義雄から、監督をしていた鈴木秀丸宛てに創部当時のいきさつを書き記した便箋が、筆者の手元にあるのでそのまま載せておく。日付が記載されていないので、いつ頃書き記したか不明であるが、おそらく昭和20年代後半と推測する。当時はどの部も同様で部員不足・道具の不備などは当たり前で、試合当日他の部から選手を借り、試合に臨んでいた事がしばしばあった。

創部にあたっては、慶応大学や早稲田大学の監督也先輩方にアドバイスを受けたようである。





専用グラウンドの設定と合宿所

大正15年、それまでグラウンドがなく練習場を求めてさまよっていた部員に良報が入った。その年の6月1日、練習グラウンドが開設される事を知ったのであった。場所は和田堀之内字松の木（現＝杉並区松木）である。暫くその地で練習は続けられたが、同地は借地のため、間もなく使用できなくなり、再び練習場探しが始まった。王子北町（現＝北区神谷）、豊島園（文部省体育研究所）、新丸子など転々とし、練習をしたようである。

法政大学ラグビー部として専用グラウンドが完成したのは、昭和11年4月のことである。木月に法政大学予科校舎が建設され、総合運動場の一角にラグビーグラウンドが創られた。法政時代を創り、多くの日本代表選手を送り出したのも、ここ元住吉（木月）グラウンドである。古い先輩の話では食糧難の中、周りは田んぼと畑、時々畑で野菜を少々つけいた事や、味噌汁に青ガエルが混入していた事などの話を聞いた事を覚えている。

昭和25年に完成した元住吉合宿所は、木造平屋建て、蔵木約15坪である。現在地に移転するまでには何度か改築、増築が行われ、最後は古材にて二階建ての合宿所が建てられた。ここで生活したOBは多く、思いで深い懐かしい地である。昭和60年秋、多摩校舎の竣工に伴いグラウンドも多摩キャンパス内に移転、合宿所も現在地（八王子市）に移転。元住吉合宿所とは違い、当時としては学生が生活しやすい環境の建物が完成し、今もなお利用されている。

関西大学との定期戦

法政大学体育会各部の多くは、関西大学と定期戦を組んでいる。ラグビー部も大正14年6月14日、神宮競技場で第一回定期戦が開催された。関大ラグビー部は、大正12年の春に創部され、大正14年から阪神リーグに参戦して実践を積んでいた。第一戦は前半3対3の同点、後半も両チームともよく守り、得点を許さず引き分けに終わった。今年も6

月、第77回が終了したが、残念ながら負けたようである。

夏季合宿の開催

大正15年8月、群馬県伊勢崎町の草蔵寺公園グラウンドで、初の夏合宿が行われた。参加者14名は、グラウンド状態が悪い中、午前・午後各4～5時間一日8時間強の練習をし、汗と泥にまみれた。手足は傷だらけの状態になるなど、かなりハードな練習が行われたようである。この年以降夏季合宿は毎年行われ、翌15年は静岡、昭和2年、3年は戸倉温泉、昭和6年から菅平での合宿が始まり今日に至っている。戸倉温泉での合宿は、擦り傷を早く治すため、この地を選んだと聞いている。今では考えられない事であるが、夕食時、芸者さんと呼ばれ、酒を酌み交わし、楽しい合宿であったと聞いた事がある。草蔵寺公園グラウンドでの合宿とは大違いの感を受ける。当時のキャプテンは次のように述べている「法政の戦力は依然Aクラスに至ってない、多くの課題を残す1年であった」戦力だけなのか、疑問を感じる合宿生活である。ラグビー部長の高橋一太郎先生も、「鍛練の場としては相応しくなく、何処か適当な場所はないものか」と思案に明け暮れていたのである。

菅平とラグビー部の繋がり

この様な状況の中、当時元上田・真田地区の振興を計画していた上田電鉄の柳沢健太郎専務との出会いがあり、昭和6年菅平合宿が始まったのである。菅平高原の観光産業はスキー場開設が基礎になり、その後ラグビー合宿誘致、テニス合宿など観光産業の形態を作り上げた。しかし昭和12年日中事変勃発、12月8日、日本は米・英両国に宣戦布告し太平洋戦争に突入した。

ラグビー部もその影響を受け、昭和6年より始まった合宿も昭和14年、戦前最後の菅平合宿を行った後、戦後昭和23年8月、茨城県勝田市の日立製作所、勝田工場グラウンドで夏合宿が行われるまでの8年間、合宿は中止されたのである。

菅平合宿の再開

昭和26年の春、菅平から一人の男がラグビー部監督の鈴木秀丸を尋ねて来た。菅平ホテルの主人渡辺才智である。目的は菅平合宿再開のお願いであった。渡辺は横浜市出身であり、菅平には戦後ホテル経営ではなく、別な目的を以って上山したが、縁あって後の“菅平会館”の管理者として、長く地域の方々と共に菅平開発に努力した一人である。

渡辺は、ホテル前の地元住民真砂氏（まさご）から「鈴木監督は木月校舎にいらっしゃる」と聞き、面識のない鈴木秀丸を何の連絡もせず尋ねたのであった。午前10時頃両人は学内で初めて出会い、初対面の挨拶を済ませた。鈴木秀丸も

菅平の渡辺が何しに來たのかその真意を察していたのである。二人はすぐに意気投合し、その年の夏合宿は菅平に決定した。

渡辺はもう一点大変な事をお願いしなくてはならなかった。それは食料である。配給米だけでは学生に食べさせる米が不足するので、闇米を準備する心算でいたのであるが、渡辺には米を買う金がない、そこで難しいと思いつつも5万円の借金をお願いした。話を聞いた鈴木は席を立ち暫くすると5万円を手にして戻ってきた。そして渡辺に、「学生に腹いっぱい食べさせてくれ」と言って渡したのであった。渡辺は「一面識のない突然現れた男に疑いもせず5万円を渡した鈴木に対し、驚きよりもあきれの思いが強かった」と述べている。著者もいまだに5万円を何処から工面したのか不思議でならない。スキー客で賑わう冬の菅平と同様に、夏の菅平の賑わいをラグビーで、と願った渡辺と法政ラグビーと菅平に対する強い愛着を持った鈴木とが、初対面とはいえお互いに相通じるものがあり、信頼した結果であろう。

今日、菅平はグラウンドも100面以上を有す日本一のラグビー夏合宿地として繁栄している。その菅平に「ラグビー合宿最初のチーム入山60年」を記念し、法政大学の名が刻まれた記念碑が当時練習をした現在の町営グラウンドの脇に造られている。因みに早稲田大学は昭和7年、夏合宿地を軽井沢から菅平に移している。

関東大学ラグビー初優勝～第一期黄金期

終戦を迎え、瓦礫に化した日本の町に、少しずつラグビー仲間が集まりはじめ、各大学に復活の兆しが見え始めた。昭和20年の後半には各大学チームの練習再開に伴いチーム数が増加し、今までの対抗戦方式の試合では対戦チームや試合数にもばらつきが生じ、順位決定方法に問題が現れた。それを契機に昭和29年6月、スケジュール会議で2部リーグ制が提案された。

この問題は協議の結果、従来通り対抗戦方式で行うことが決まったが、昭和31年シーズン終了後、再びスケジュール問題が話し合われ、昭和32年関東大学ラグビーはA；Bグループに分かれた。その詳細な経緯については省くが、上位6チーム、下位6チームと云う考え方であった。法政はBグループ、下位チームに決定した。この結果を知らされた部員たちは「涙を流し悔しがった」と当時の草ヶ谷監督は記述している。

その悔しさを糧に部員たちはBグループ優勝を目標に猛練習に励んだ。その年の夏合宿、シーズン直前の石岡強化合宿など、今まで以上に万全を期し、シーズンを迎えた。Bグループの戦績は、結果5戦4勝1分けとなり、Bグループ優勝の目標を達成した。この事も高く評価できるが、特筆すべきは、この年の10月13日Aグループ明治大学との交流戦に創部以来初めて勝利した事である。この勝利は、我がラグビー部隆昌、発展の足懸りとなる歴史的一勝であり、黄金期のスタートと云える。

昭和33年、Aグループに昇格した法政は11名の卒業生を送り出した事によりチーム編成に苦しんだが、3勝3敗の4位でシーズンを終了した。古豪早慶明に次いで4位は、今までの成績から見れば、健闘に値する結果と云える。

昭和34年、貴志、尾崎、勝岡等多くの有望新人を獲得し秋シーズンを戦う布陣が出来上がった。前年度の成績、メンバー構成から、上位進出は可能であるが優勝までは難しいであろうと誰しもが予想したのだが、10月対中大を皮切りに、慶大、早大、立大、明大を破り、無敗で最終戦の日大を迎えたのであった。当然勝てば関東大学1位、即ち優勝である。観衆1万人の見守る中試合は開始された。前半5対3、後半6対0の接戦の結果11対3で法政が勝利し、創部35年目にして初の優勝を遂げたのであった。キャプテン小野は「初めは優勝を意識し堅くなっていたが、後半から新人3名の活躍もあり、点差ほど緊張感がなくゲームが出来た」と述べている。

この年を機に、昭和46年まで常に大学ラグビー界の中心的存在としてその実力を全国に余す処無く示した。正に第一期黄金期と呼ぶべき時代である。

日本選手権大会の開催

昭和30年中頃、徐々に観客動員数の減少が目立つ様になってきた。それを危惧した協会は日本一決定戦の開催により、ラグビーファンの精神的高揚、観客動員数の増加が見込めると判断し、関東協会とNHKが協議を重ね、昭和36年に“日本ラグビー協会招待NHK杯”の名称で事実上の日本一決定戦が開催された。

この日本一決定戦はNHK杯の名称で昭和38年までの3年間開催されたが、昭和39年3月に“第一回日本選手権大会”と名称を改め、大阪花園ラグビー場で開催され、学生代表は関東の法政、関西の同大、社会人代表は、社会人大会1位の八幡製鉄、協会推薦の近鉄の4チームが出場し、トーナメント方式で日本一を争った。

法政は3月10日、第1試合で近鉄と対戦したが、風雨の強い悪コンディションの中、前半18対3、後半0対3、結果18対6で敗れてしまった。一方同大は、八幡製鉄、決勝で近鉄を破り大学チームが日本一に輝いた。当時は社会人チームと大学チームとの力の開きはあまりなく、小差のゲームが展開されていた。

その後協会は、真の日本一を決定するには複数のチームによるトーナメント方式の試合より、全国学生チャンピオンと全国社会人チャンピオンの優勝者対決がベストであると考え、翌年の第二回大会からこの方式に変更し、平成9年第三十四回大会まで採用された。

全国大学選手権の開催と初優勝

大学ラグビーは対抗戦方式で発展してきた。大学選手権が

開催されるまで大学日本一を決める明確な試合は無かったと云える。あえて大学日本一決定戦と称するならば、東西の優勝大学による大学東西王座決定戦であり、それに勝利したチームが大学日本一云えるであろう。しかし、定期戦を行ってない大学が優勝した場合は、東西対抗戦が行われず、その年は該当チームなしとして記録されていた。日比野弘日本ラグビーフットボール協会名誉会長編書の「日本ラグビー全史」大学ラグビー史の中に「日大、法政が優勝した年には、関西の同大との対戦がなく、慶大が優勝した年も関西学大との対戦がなく、王座決定戦そのものが不成立となった。私はこの時代に早大の一部員だったが、スケジュールをすっきりさせほしいと強く願っていた」と記述している。関東大学ラグビー順位決定方法の問題も前に記述したが、大学東西王座決定戦（当時の大学日本一）に関しても、同じような曖昧な点が生じていた。

問題を解決すべく昭和40年、東西王座決定戦の形式を残しつつ“第一回全国大学選手権が開催され、関東はAグループ1位法政、Bグループ1位早大、関西は1位同大、2位関大の4チームが出場し、法政は関大と対戦した。定期戦を組んでいる両チームは、定期戦を兼ねた試合とし、結果は”19対3で法政が勝利し、同大を破った早大と、関東大学ラグビーで戦った、両チームが決勝で再び対戦することになった。秋シーズン12対6で敗れた早大は、雪辱を期し法政に挑んだが、法政のスピードあふれる攻撃、堅いディフェンスに阻まれ、14対9で法政が再度勝利し、第一回の記念すべき大会に優勝した。第一回全国大学選手権優勝の記録は、永遠に法政の名をラグビー界に残したもので、高く評価されるべきものと考えられる。

そして昭和40年1月15、真の日本一を決める“第二回日本選手権”が秩父宮ラグビー場で開催され、全国社会人大会優勝の八幡製鉄、全国大学選手権大会優勝の法政により争われた。日本一は社会人か学生かと注目の中、15000人の観客を集めたこの試合は両チームとも素早い展開ラグビーを示し、攻守共に激しい攻防が繰り返されたが、15対6で八幡製鉄の勝利に終わった。法政の小柄なFWの運動量の多さ、スピード豊かなBKの攻撃など、若さあふれるプレーに観客から大きな拍手を受けた。ラグビー人気がやや低下しはじめた時期に、そのムードを一新させた日本選手権であった。

法政時代のはじまり

第一回大学選手権から第四回まで決勝は法政対早大の対決であった。昭和35年に弱冠24歳で監督に就任し5年目を迎えた石井徳昌監督は、第四回大会をむかえたその年、学生に対し厳しく激しく指導を行い他大学が驚くほどの練習量を積んだ結果、秋シーズンを全勝で終了し大学選手権に駒を進めた。当時の学生は早大に対する思いは特別なものがあり、「絶対負けたくない」と強いライバル心をもっていた。第一回大学選手権から数え法政一勝二敗で迎えたこの第四回大会

は当然勝利が目標であるが、特に4年生にとっては是非とも優勝し早大に対する戦績を二勝二敗の五分にして卒業することが強く囑望されていた。

試合は当然甲乙付け難く大接戦となった。前半を8対0で法政リードで折り返すも後半に入ると早大の反撃が始まり8点を奪われ同点にされてしまう。誰もが引き分けが濃厚と思われた残り3分、法政BKのパス攻撃が炸裂し水谷が左隅にトライをあげ優勝をかざった。合宿所での祝勝会は著者2年生の時であり、これこそ無礼講と云える嬉しく又大変な騒ぎであったことを覚えている。

第一回大学選手権から四年連続決勝に進出した我が法政チームであったが、その後3年間は準決勝で敗退、ベスト4止まりであった。しかし第八回大会で4大会振りに決勝に駒を進め再び法政が激突した。結果は18対3のスコアで敗れ3度目の優勝は叶わなかった。この試合で後半15分、相手BKのミスキックがゴールポストに当たり、跳ね返ったボールが早大選手の胸にすっぽりと収まりそのままトライという早大にとっては幸運、法大にとっては不運なプレーであった。この試合の勝敗を決定した大変珍しいトライであり、著者の脳裏に強く印象に残っている。

低迷期

第一回大会から第八回大会まで法政は常にベスト4以上の成績を残していたが、昭和47年秋シーズンは誰もが予想もしなかった結果に終わったのである。8月の夏合宿終了時点でマスコミの予想でも優勝候補の筆頭に挙げられていたが、シーズン突入からまさかの三連敗を喫し、後半戦突入後も狂いを生じリズムを取り戻すことは出来ず、リーグ戦結成以来初の5位に転落し大学選手権出場も断たれたのである。当時OBの殆どは“大学選手権出場”は当たり前と思っていたのであったが、この後八年間出場できず低迷したのであった。

復活とは云えないが僅かな光が

昭和42年、関東大学ラグビーは対抗戦：リーグ戦両グループに別れ、上位4チームがタスキがけの方式により大学選手権出場決定戦試合、いわゆる交流戦が行われるようになった。昭和47年以来低迷期の中にあった法政であったが、昭和54年8年ぶりにリーグ戦を制覇し交流戦に駒を進めた。しかし対抗戦4位の筑波大学に破れ大学選手権に足を運ぶことは叶わなかった。

昭和55年、大学創立100周年を迎えたこの年、金子征史団長（法学部教授）以下35名にてNZ遠征合宿を行い強化を図った。その結果9年ぶりに“大学選手権”に出場し、準決勝まで駒を進め同大と決勝進出を争ったが、後半同大の攻撃を受け逆転負けを喫してしまった。

久しぶりの準決勝戦を見た筆者としても忘れえないシーン

がある。それは後半15分頃、法政BKの相手ゴールポスト真下に蹴ったボールをグランディングすればトライという場面があったのだが、それにもかかわらず、追いかけた選手がボールを追い越しグランディングできず、相手選手に押さえられ後半無得点に終わり敗れてしまったのである。これは未だに理解しかねるプレーであり、何故ボールを追い越したのか本人に確認したいものである。それがなければ決勝進出間違いないと、今でも確信している。

島崎新体制

昭和60年4月、昭和35年就任以来25年間務めた石井監督から島崎に監督が移された。石井は次のように言い残している。「私がそうだったように試行錯誤を繰り返し、監督という重責に、時として耐えきれなくなるときがあると思う。だが、負けずに信念を持って、法政の伝統を守ってくれ」と伝えている。他にも法政ラグビーに対する想いを強く語っていたことを思い出す。平成20年夏石井さんは72歳の生涯を終えた。指導を受けた多くの学生は師のご冥福を祈っている。

就任1年目の島崎は昭和50年後半より続くラグビー部の沈滞した雰囲気、私生活の改善の為必死に努力したが、成績向上には繋がらずリーグ戦6位に終わってしまった。島崎は「勝つためには手段を選ばず」という理念から私生活には大変厳しい指導をしていた。著者もこの年からコーチとして島崎と共に学生の指導に当たった。後に監督に就任した駒井もこの時期からスタッフの一人としてスタッフに入っている。

島崎から著者へバトンタッチ

平成3年、著者は6年間監督を務めた島崎からバトンを受けた。監督に就任した私にとってコーチとして島崎の下で学生を指導した6年間は大変勉強になった期間であった。この経験が監督としての指導方針：方向性を決定するに大きく影響したと言える。

私は学生と向かい合うとき

- 1 学生を信頼する
- 1 意見を聞き入れる
- 1 意見交換の場所を作る
- 1 注意（叱る・怒る）する事を怠らない
- 1 勝利は学生の努力の結果
- 1 学生のミスは指導者の指導力不足

以上のことを念頭に置き指導方針として進めたが、いざ指導をすると大変難しく100人もの部員に個性があるのは当然と知りつつも、学生との衝突、コーチ陣との意見のくい違い等がしばしばあった。

25年ぶりの学生チャンピオン

就任2年目となる平成4年、ラグビー協会関係者、マスコミ、ファン、法政関係者等、誰もが予想をし得なかったリーグ戦優勝、更に25年ぶりの大学選手権優勝、大学日本一を獲得した。それまで交流戦にも勝てず、12年ぶりに出場した大学選手権でいきなり優勝したことを誰もが喜びと驚きを感じたことであろう。しかし監督である筆者の思いは少々違っていた。前年の交流試合の早大戦であるが終了3分前までリードしていたながら、逆転され悔しい敗戦があったのである。この惜敗の中に活路を見出し、本年は上位進出への確かな手応えを感じていたのである。

この年の夏合宿でのオープン戦はすべて敗戦、シーズンインを目の前にどう乗り越えるか、頭を痛めた時期もあったが、監督より選手が危機感を感じ取り、シーズン初戦対東洋大戦に大勝した事が、リーグ戦を制覇、大学選手権優勝に繋がった大きな要因と考えている。

ベスト4の戦いは早大対関東学院大、法大対明大戦の2カードで行われた。早大は関東学院大に勝利し、一方法政はすべてのプレーで明大を上回り、42対18の大差をつけ大勝し明大の大学相手の連勝を「39」でストップをさせた。当時の新聞記事(産経スポーツ)に「6万観衆は、なす術もなく法大に蹂躪される明大の思いもよらぬ試合展開に驚くばかりだった」と記されている。決勝は宿敵早大との戦いとなった。実際宿敵と思っていたのは、選手よりむしろ監督、OBだったのかもしれない。

試合は当然の如く大接戦になった。前半を20対9の法政リードで折り返し、後半34分早大増保選手にトライを許し23対27と逆転された。しかしその4分後、藤原がラインアウトから劇的なトライを決め30対27と再逆転し、念願の3度目の優勝をかざったのである。

この結果は学生の努力の賜物であり、中でも特にキャプテン荒川 淳のリーダーシップを私は高く評価したい。8月の夏合宿で足首を骨折し、12月初旬まで入院治療生活を送ったことによりキャプテンとして一度も試合に出場出来なかった。しかし彼は松葉杖をつきながらグラウンドで声を出し仲間を応援し、合宿所での規律ある生活を監督以上に求め、キャプテンシーを発揮しチームの先頭になり努力を惜しまなかった。その姿は、歴代のキャプテンの中でも優秀な一人として高く評価され位置づけられるであろう。監督として彼に大いに助けられたことに感謝している。

3度目の日本選手権出場

第30回日本選手権は雨の降りしきる国立競技場に於いて1月15日開催された。社会人王者神戸製鋼に対し大学チャンピオンとして挑戦する権利を得たのである。総ての面において上回る神戸製鋼に法政どう戦えるか楽しみであった。しかし実力差は如何ともし難く結局ボールを獲得できずノートライ

に終わり41対3のスコアで敗退した。敗戦はしたが出場した選手は勿論、スタンドで観戦したラグビー部全員にとって素晴らしい経験をしたことを忘れてはならない。この誇りと自信を人生の糧として、役立たせてもらいたいものである。

2 連覇に挑戦

平成5年4月から新1年生を迎え、来年1月の大学選手権優勝を目指し練習を始めた。この年から大学選手権出場枠が8チームから16チームに増え、関東は交流戦が廃止されリーグ戦、対抗戦共に上位4位までが自動的に出場、5位チームが北海道、東北代表校と出場決定戦を行う方法に変わった。

法大は前年の優勝メンバー12名が残り、各方面から優勝候補の筆頭に上がっていた。しかし、大学スポーツは毎年選手が変わりチーム力が測れないことが当然である。連覇というのは大変難しいことであるが、監督として学生を信じ「今年のチームは努力を惜しまず、自信を持ち、自分たちの力を百パーセント発揮すれば結果はついてくる」と学生に諭してきた。

秋シーズンを迎えた9月から我々は順調にリーグ戦を勝利し、第一の目標であるリーグ戦を制覇し大学選手権に向け準備を進めた。選手権一回戦、二回戦は楽な試合運びで勝利できたが、準決勝の対京都産業大学戦では相手の強力FWに苦しみ、後半何とか逆転し28対19で勝利し決勝に進んだのである。

過去法政は大学選手権連覇をしたことがなかった。しかし決勝に出場したことで連覇できる資格を得たのである。決勝の相手は昨年準決勝で戦った明大であった。結果は41対12で敗れてしまい連覇はならなかった。試合後明大キャプテンの元木君は、「昨年の悔しさを心に刻み決勝で法政と優勝を争うために今日まで全員でやってきたんだ」と述べている。一年間法政を倒すことに執念を燃やした明大に対し、法政は昨年明大を苦しめたラインアウトを逆に取られ、バックス陣の激しいタックルに圧力を受け、昨年とはまったく逆なゲーム内容だった。

この一年間順調すぎた法政と、打倒法政に執着した明大の思いが、結果として表れたのかもしれない。この事は指導者の責任と強く感じた次第である。その様な中、この年も昨年同様決勝戦にキャプテン島津が怪我のため出場できなかったが、責任感の強いキャプテンであり、ここまで来られたことは彼の力も多かったと思っている。

平成6年から平成23年までの16年間については、少々長くなるので省き、監督名と記録を記述させて頂く。

近況

平成22年は残念ながら初の2部との入れ替戦にまわり関係者を心配させたが、その入れ替戦を何とか勝利し2部転落を免れた。本年23年は3勝4敗第5位の成績に終わり東

年度（平成）	監督名	リーグ戦順位	大学選手権順位
六年	武村秀夫	二位	ベスト 8
七年	々	三位	ベスト 4
八年	々	三位	ベスト 16
九年	中西成行	二位	ベスト 4
十年	々	二位	ベスト 8
十一年	武村秀夫	五位	ベスト 16
十二年	々	二位	準優勝
十三年	々	二位	ベスト 4
十四年	山本 寛	二位	ベスト 4
十五年	々	二位	ベスト 4
十六年	々	優勝	ベスト 4
十七年	齊藤 実	二位	ベスト 4
十八年	武村秀夫	二位	ベスト 8
十九年	駒井孝之	四位	ベスト 8
二十年	々	二位	ベスト 4
二十一年	々	二位	ベスト 8
二十二年	々	七位	出場せず
二十三年	小野木 修	五位	ベスト 16

北代表と大学選手権出場を争う代表決定戦に出場し勝利を収め、12月18日、2年ぶりに出場した大学選手権一回戦を関西1位の天理大学と戦い、39対19で敗れてしまった。因みに天理大学は決勝まで駒を進めた。

あとがき

この「法政大学ラグビーの歩み」を寄稿するに至った経緯は、まもなく創部90年を迎える法政ラグビーの歴史についてあまり知らない学生・関係者各位に、代々受け継がれてきた法政大学ラグビー90年の歩みを知って頂くことを第一とし、更にその情熱を忘れることなく更なる発展に邁進される事を期待し私心を含み寄稿した次第である。本来ならば創部から現在に至るまでの歴史、全記録など時間をかけ研究し残す必要があるのかと思われる。

終りに、多くのラグビー協会関係者、他大学OBから「法政は強くなくてはいけない」と云うことをよく聞かされる。法政関係者以外にも法政ラグビーを応援してくれる多くの方々がいることを胸に刻んで頂きたい。

参考・引用文献

「法政大学ラグビー部六〇年史」1987
「日本ラグビー全史」2011 日比野弘著 P210
「関東ラグビーフットボール協会五〇年史」1976
「早稲田ラグビー史の研究」 日比野弘著1997
Number RUGBY, The BIGGEST JOY OF ALL 1994
「産経スポーツ」 1993 1月3日版